

令和元年6月10日現在

機関番号：24506

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K15932

研究課題名(和文)若年成人期のがん患者が抱える性や生殖機能の問題解決支援とフォローアップ体制

研究課題名(英文) Support and follow-up system for solving the sexual and reproductive health issues among young adults with cancer

研究代表者

工藤 美子 (KUDO, Yoshiko)

兵庫県立大学・看護学部・教授

研究者番号：40234455

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：若年成人期のがん患者の支援に携わる看護師調査より、患者から性機能に関する質問や相談がなされにくいと、看護師は性に関するニーズを見極め、本人の羞恥心や意向に配慮した対応の必要性が示唆された。また、予後不良の患者の妊孕性温存の適応の是非と、妊娠するために治療を変更したり、延期したりすることの是非が課題として示された。これら課題に対し、医療者は患者の切迫した病状においても、患者の意向の確認や妊孕性温存が今後の希望につながるかなどのアセスメントが必要であること、妊娠するために治療を変更・延期するには、妊娠だけでなく養育が可能かなど多角的な視点からの意思決定支援が必要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

若年成人期のがん患者の性・生殖機能に関する問題解決支援・フォローアップ体制構築の為には、特に妊孕性に問題を生じる場合の意思決定時、診断早期や、初期治療後に性生活・性行動に関する身体・精神面への影響を自覚する時期に着目する事の重要性が本研究により示された。また、精神・心理面も含めたトータルケアを提供するフォローアップ体制が必要である。さらに、がんと生殖に関する知識を強化するだけでなく、倫理的葛藤の解決も含めた包括的な教育プログラムと、困難な意思決定支援を提供する専門職自身へのフォローアップ体制も重要である。

研究成果の概要(英文)： This study aims to explore nurses' perceptions of the sexual and reproductive health issues among young adults with cancer via group interviews. Although they did not encounter questions or consultations regarding sexual function raised by patients, patients might wonder how to ask about such issues. The nurses felt that they needed to improve their skills to open the discussion and to provide effective consultations.

Two themes emerged from interviews about their cases. One was the nurses' dilemma about the patients who wished to have fertility preservation, but it was contraindicated due to his/her poor prognosis. The other one was the dilemma about the patients who desired to suspend or alter cancer treatment for continuing pregnancy. Thus, a multidisciplinary team including midwives will need to support the decision making process by weighing patients' desires and wishes against their medical conditions

研究分野：母性看護学

キーワード：看護学 思春期 若年成人期 がん患者 セクシュアリティ

1．研究開始当初の背景

日本の思春期・若年成人がん患者数は、全がん患者数の3.7%であるが、思春期・若年成人期に発症するがん患者の数は、小児がん患者の約3倍と推測され、25歳以上の患者は思春期・若年成人期の患者の50%以上を占める。年齢によって発症するがんは異なっており、15歳～19歳では白血病、脳腫瘍、リンパ腫が、20歳～29歳では、性腺腫瘍、甲状腺がんが上位を占め、30歳～39歳では、乳がん、子宮頸がんが増え、性腺腫瘍、大腸がんが続く。このようにこの世代のがん病相は多様であるが、精巣がん、婦人科がん、大腸がん等の生殖機能に直接関係のあるがんや治療が性機能や生殖機能に影響することにより、がん患者の結婚・妊娠といったその後の人生設計に大きな影響を与える。

日本では、がん患者の妊孕性温存の標準的な方法が示されている。女性がん患者においては、結婚しているなどパートナーがいれば、胚（受精卵）凍結保存が推奨され、パートナーがいなければ、未受精卵凍結保存を行うことになる。また、がん治療により無精子症となるリスクが高い男性がん患者には、治療前に精子凍結保存が推奨されている。日本の医療保険は、国民皆保険により国民全員が加入し、その保険により、患者は治療費の3割を負担するが、妊孕性温存にかかる費用は、医療保険が適応されず患者が全額負担する。

International Charter of Rights for Young People with Cancer が定めた「がんの若者の権利章典」をもとに、思春期・若年成人がん患者サバイバー支援研究会により「東京宣言」が作成された（丸、2015）。そこには、がんの若者の権利として、がんとその治療が生殖機能に及ぼす影響について、適切な時期に必要なかつ十分に説明を受け、必要に応じてカウンセリングや生殖医療を受けることが記されている。がんとその治療が性機能や生殖機能に及ぼす影響は、がん種や治療を受けた年齢、治療の内容、薬剤投与量や放射線照射量によって異なるため、いつ、誰がどのように、これらの機能に及ぼす影響を説明するのが望ましいのか、この年代のニーズにあわせた情報提供の在り方を検討する必要がある。さらに、妊孕性温存に関する研究も進められており、その対策はがん治療開始前（がん診断直後）に求められるが、その意志決定への支援も不十分と言われている。妊孕性温存の有無にかかわらず、がん治療後の生殖機能や妊孕性についての支援が必要であり、長期にフォローアップすることの重要性は医療専門職の中で認識されはじめているが、その体制は十分に整っていない。

2．研究の目的

本研究は、若年成人期のがん患者が抱える性や生殖機能に関わる問題を明らかにすると共に、がん患者が抱える性や生殖機能・妊孕性の問題に対する支援のあり方とフォローアップ体制を明らかにすることを目的としている。その目的達成のために、若年成人期のがん患者・サバイバーの支援に携わっている看護師の認識を明らかにすることにより、この世代を対象とした支援の充実に向けた課題と方策を検討した。

3．研究の方法

がん患者の看護経験がある看護職を対象に、グループインタビューを実施した。1グループは2～4人の構成で、若年成人がん患者が抱えている性機能や生殖機能に関する問題、問題に対する支援、支援する上での困難や課題について、1回90分～120分のインタビューを行った。本研究は東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委員会の承認を得て、実施した。

4．研究成果

本研究に対し研究協力の同意が得られた看護師は、10人であった。看護師全員、がん看護の

経験が6年以上あり、うち7人はがん看護専門看護師であった。

本研究に参加した看護師たちは、性機能に関する質問や相談は患者から自発的にはされないかと捉えていた。特に男性がん患者からは相談を受けることがなかったが、男性患者は男性の医療者に質問や相談をしているかもしれないと捉えていた。また、がん患者たちは実際に困らないと質問や相談をしないと捉えてもいた。性についてオープンに話すことをしない日本人の特性も踏まえ、看護職は若年成人期のがん患者の性機能の問題把握のために、がん患者の性に関するニーズを見極め、本人の羞恥心や意向に配慮した対応ができるようになる必要がある。

生殖機能に関しては2つの課題と支援の方向性が明らかになった。1つめの課題は予後不良の患者の妊孕性温存の適応の是非である。看護師は、予後不良の若年成人がん患者に妊孕性温存の話せず、治療を進めようとする医師の判断に疑問を持ち、精子保存が患者の今後の希望につながると医師を説得し妊孕性について説明した事例を語った。その事例は、体調が悪い中精子保存を行い、数ヶ月後に亡くなったが、患者の行動が婚約していた女性のこれからの生きる支えになった。医療者は患者の切迫した病状により妊孕性の説明をする必要がないと判断しがちであるが、患者の意向の確認や、妊孕性温存が今後の希望につながるかといったアセスメントをする必要性が示唆された。

2つめの課題は、若年成人期のがん患者が妊娠するために、治療を変更したり、延期したりすることの是非である。看護師は、血液疾患で移植治療前に放射線を浴びることから、将来妊娠するために卵巣を保存したいと卵巣の遮蔽を希望する患者に対し、医師は再発のリスクが高くなるためできないと患者に伝え、患者が医師の意向に負け、妊孕性より治療を優先した事例を語った。別の看護師は、血液疾患で化学療法せずに移植治療となる女性患者が、結婚予定のパートナーがいることから受精卵保存を希望したため、医師が患者の希望を聞き入れ移植時期を遅らせることを決定した事例を語った。これらの事例から、患者は妊娠するために治療の変更・延期を希望するが、妊娠することだけでなく、子どもを育てることが可能かなど多角的な視点からの意思決定支援を行う必要性が示唆された。このように、妊娠するために治療方法に悩む患者がいることから、妊孕性温存や治療方針を決定する際には個々の意思決定の質を高める支援が必要である。

今後、若年成人期のがん患者の性や生殖に関する問題を解決するための支援やフォローアップ体制を構築するためには、妊孕性に問題が生じる場合の意思決定時、診断早期、初期治療後の性生活や性行動における身体・精神面への影響を自覚する時期に着目する事が重要と思われた。また、精神・心理面も含めたトータルケアを提供するフォローアップ体制が必要である。これらの問題に関わる専門看護師や助産師等の看護専門職は、問題が発生したごく初期の段階から関わる職種であり、多様な職種による専門的な支援が必要かどうかを見極めるスクリーニング機能と、がん患者に適切な情報を提供する能力を持つ事が求められる。したがって若年成人期のがん患者に関わる看護職には、がんと生殖に関する知識を強化するだけでなく、倫理的葛藤の解決をも含めた包括的な教育プログラムが必要である。さらに、困難な意思決定支援を提供する個々の専門職に与える精神面への影響も考慮し、専門職自身へのフォローアップ体制の構築も重要である。

【引用文献】

丸光恵(2015)思春期・若年成人がん患者への支援 - 諸外国の現状と課題 -、小児看護、38(11)1352 - 1358 .

5 . 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

Yoshiko Kudo et al. Nurses' perceptions regarding sexual and reproductive health issues among young adults with cancer or among cancer survivors via focus group interviews. The 3rd Global Adolescent & Young Adult Cancer Congress (2018)

Akiko Tomioka et al. Perceptions of nurses on care for childhood cancer survivors with sexual and reproductive dysfunction. The 3rd Global Adolescent & Young Adult Cancer Congress (2018)

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：丸 光惠

ローマ字氏名：(MARU, Mitsue)

所属研究機関名：甲南女子大学

部局名：看護リハビリテーション学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 50241980

研究分担者氏名：富岡 晶子

ローマ字氏名：(TOMIOKA, Akiko)

所属研究機関名：東京医療保健大学

部局名：医療保健学部看護学科

職名：教授

研究者番号(8桁): 90300045

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。